

子どもたちに 聞かせたい創作童話 第42集

鹿 児 島 市
鹿 児 島 市 教 育 委 員 会 編
公 益 財 団 法 人 か こ し ま 教 育 文 化 振 興 財 団

刊行のことば

鹿児島市と鹿児島市教育委員会、公益財団法人かごしま教育文化振興財団では、「子どもたちの夢はぐくみ、美しい心を育てたい」という願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」を募集してまいりました。

四十二回目を迎えた今回は、県内はもとより国内三十八の都道府県から、第一部、第二部合わせて二百五点もの応募がありました。また、年齢で見ますと、十代から九十代の方まで幅広い年齢層から、作品をお寄せいただきました。

「子どもたちに聞かせたい創作童話 第42集」では、ご応募いただいた作品の中から、特選、入選に選ばれた七作品をご紹介します。身近な日常を描いたものからファンタジーなものを取り扱った作品は、どれも子どもたちの夢はぐくみたいという思いの込められたものになっております。

この作品集が、保育園や幼稚園、小学校等の教育現場のほか、図書館や公民館等のコミュニティにおいて、本の読み聞かせ等の読書推進活動に活用されますことを期待します。

また、市民の皆様が文芸活動の一環としてこの創作童話集を活用され、今後、未来を担う子どもたちの豊かな感性や優しい心をはぐくむ優れた作品を発表されますことを願っております。

終わりに、全国各地から応募していただいた方々をはじめ、作品を審査してくださいました五名の先生方、さし絵を描いていただいた二名の先生方、そして、この作品集の刊行にあたってご尽力いただきました関係者の方々に心より感謝申し上げます。

令和三年二月

鹿児島市
鹿児島市教育委員会
公益財団法人かごしま教育文化振興財団

目次

	刊行のことば	1
第一部	特選 「おしやれな百地蔵」	5
第一部	入選 「びっくりさせちやうぞ」	17
第一部	入選 「ニッツとヤールのはたけしごと」	30
第一部	入選 「やまとくんのたからもの」	43
第二部	特選 「冬將軍日記」	59

第二部 入選 「生まれ変わって何になる？」	結城 博	79
第二部 入選 「思いをつなぐ しあわせプリン」	みやぞの せいこ	100
総評		116
入賞作品の選評		119
「第42回 子どもたちに聞かせたい創作童話」募集要項		124
応募状況		125

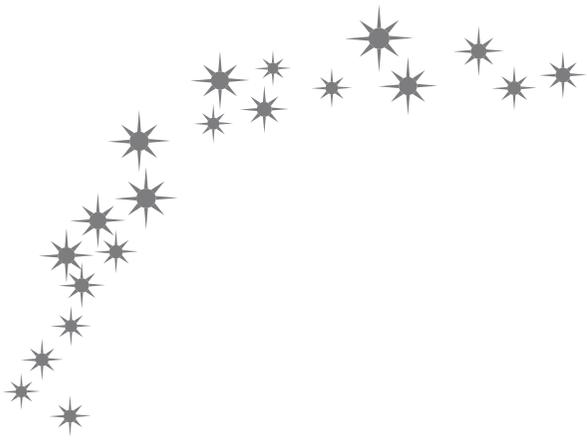
「第42回 子どもたちに聞かせたい創作童話」受賞作品

〈第一部〉 保育園児、幼稚園児、小学校低学年を対象にした作品

特選	おしゃれな百地蔵	阿部忠彦	兵庫県
入選	びっくりさせちゃうぞ	向風歩	広島県
入選	ニッツとヤールのはたけしごと	鵜沼更紗	東京都
入選	やまとくんのたからもの	弓場貴子	鹿児島県
佳作	トゲねずみハリー	鳥塚嘉紀	群馬県
佳作	ヤマネのひまわり	山本博幸	長崎県
佳作	みっちゃんのおさんぽ	鶴田貴子	兵庫県
佳作	おひさまの仕立て屋とてるてるぼうず	末永志穂	山口県

〈第二部〉 小学校中・高学年を対象にした作品

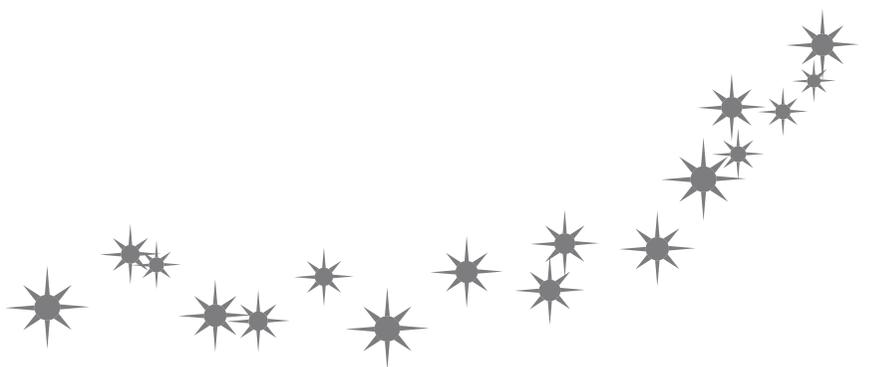
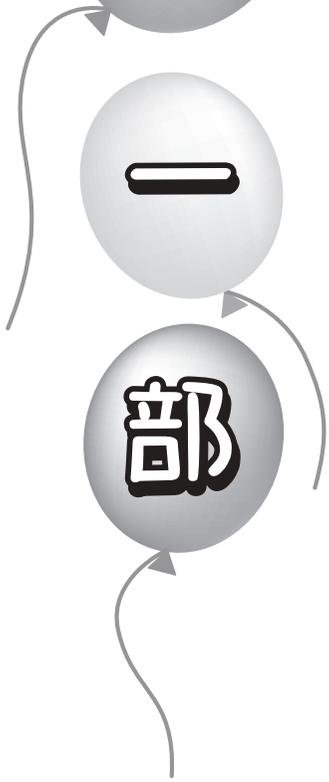
特選	冬将軍日記	関根裕治	埼玉県
入選	生まれ変わって何になる？	結城博	広島県
入選	思いをつなぐ しあわせプリン	みやぞのせいこ	鹿児島県
佳作	思いやりがさ	こんどうみえこ	東京都
佳作	母子桜	樋口達也	福岡県



第

一

部



おしやれな百地蔵ひやくじぞう

阿部 忠彦

ある村むらのはずれに、百体ひやくたいのお地蔵様じぞうさまがたてに十体じゅうたい、横よこに十体じゅうたい、きれいに並ならんで立たっておりました。誰だれが据すえたものか、今いまとなつては分わかりませんが、村むらの人達ひとたちは「百地蔵様ひやくじぞうさま」と呼よんで大切たいせつにし、朝あさな夕ゆうなに拜おがんでおりました。

八兵衛はちべゑの家いえは、代々だいいだいこの「百地蔵ひやくじぞう」のお世話せわをする役やくをしておりました。野良仕事のらしごとに出でかける前まえと夕方ゆうがた、お参りまいをし、お地蔵様じぞうさまが荒あらされていなか確たしかめるのです。

例えたとば、鳥とりのふんなどがお地蔵様じぞうさまの頭あたまに落おとされていると、きれいにふきましたし、お供そなえ物が散ちらかつていたら片付かたづけ、赤あかい前垂まえだれが破やぶけておつたら繕つくろったりもして、それは大事だいじに世話せわをしておりました。

秋あきのある日ひのことでした。

「ひふみよいつむうななやここのつとお。ひふみよいつむうななやここのつとお。とおかけとおでひやあくう、と」

八兵衛はお題目を唱えるように、お地藏様が百体あることを確かめ手を合わせました。「今日もみなみな様、元気で働かせてもらいました。ありがとうございました」

それを、こっそり木の陰で聞いていたのは、「百地藏様」の裏山に住む子狸です。

「八兵衛さんは『ひふみ…』って言ってるけど、なんて言ってるの？」

子狸は、穴に帰って母さん狸に聞きました。

「ああ、あれは八兵衛さんが数を算用しているのよ。『百地藏様』は全部で百のお地藏様が集まってなされる。たてに十体、横に十体きれいに並んでおるから、百体になるんだよ」

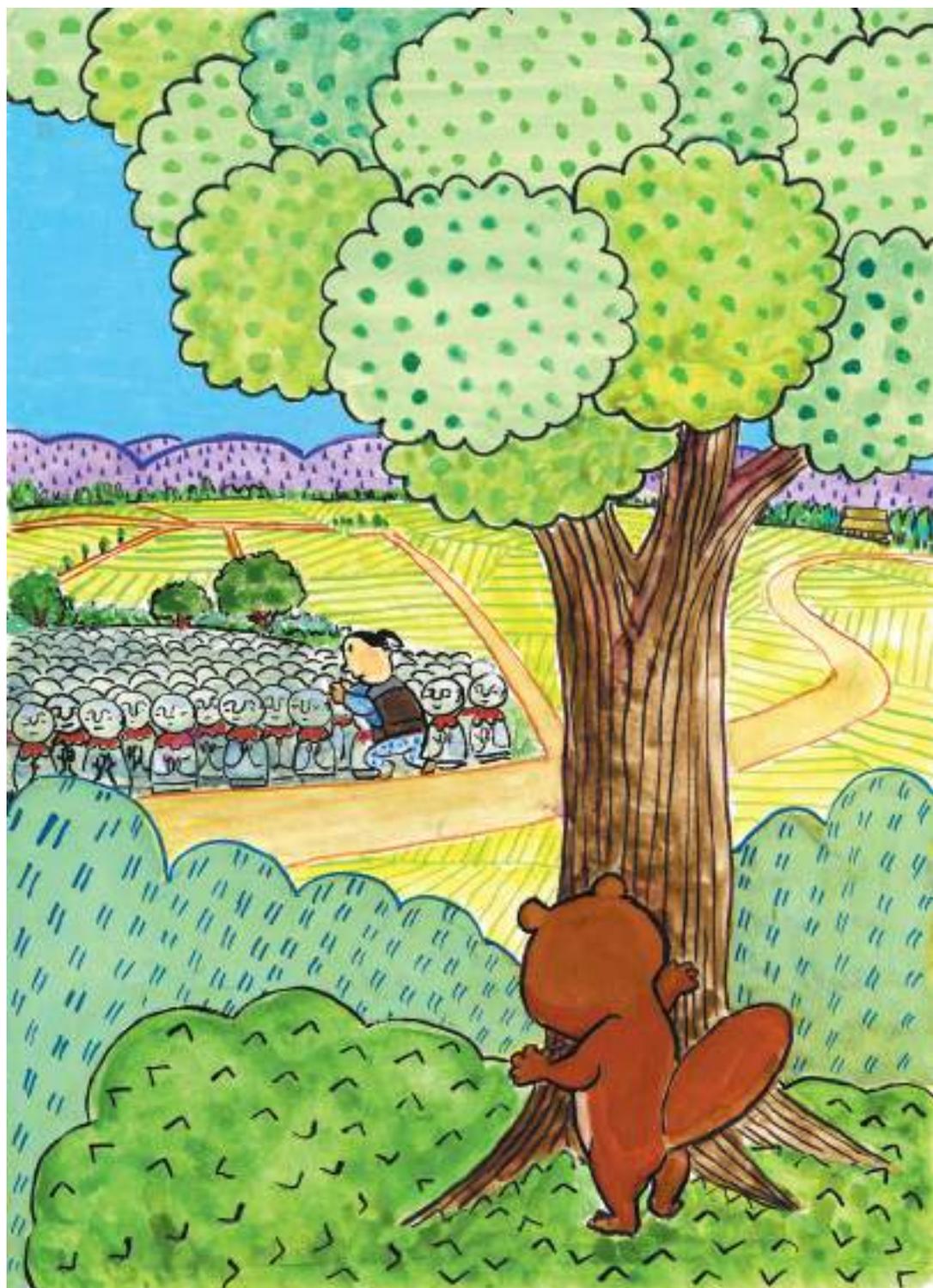
「ふうん。そうなのか。でも、怪しいものだな。お母さん、ぼく、本当に百あるか数えてみるよ」

「いいわよ。でも、坊や。おまえはいくつまで算用が出来るのだい」

「とおまで数えられるよ」

「じゃあ、どうすれば百になるのか分かるのかい」

坊やは、どうすれば百になるのか分かりません。そこで、お母さんに教えてもらいました。



「いいかい。とおを十回数えたら百になるよ」

「そうか。分かったよ」

「でも、朝になるまでに帰ってくるんだよ。八兵衛に見つかると、こっぴどく叩かれてしまふからね」

子狸は一人で「百地藏様」に出かけました。月の明るい夜なので、一人でも恐くありませんでした。

子狸は、一番後ろの列のお地藏様から、ひとつひとつ数えていきました。

「ひふうみいよ、いつぶうなな、やあここのつとお。これで十でしょう。ひいふう…」

ところが、真ん中あたりまでくると、いくつ数えたか忘れてしまうのです。

又一番後ろのはしまで帰ってやり直しです。

一日目は、十を五回までしか数えられませんでした。

「母さん。お地藏様はみんな同じ頭と顔をしているから、どこまで数えたか分からなくなつてしまふよ」

子狸は母さん狸に相談しました。母さん狸は、一生懸命考えて答えを出しました。「坊や。お地藏様の頭に目印をつけておけば、どこまで数えたか分かるんじゃないの」

「あつ、そうか。目印は何が良いかな」

「そうね。木の実をすりつぶして手にぬっておけばいいんじゃない。今なら、ヤマボウシに赤い実がなっているから、赤い印がつくわよ」

子狸は、ポンと手を打ちました。

「さすがお母さんだ。これは良いことを聞いたぞ」

その夜、子狸は、ヤマボウシの赤い実をいっぱい集め、石の上で木の棒を使ってすりつぶしました。すると、お母さんの言ったように、赤い汁がいっぴいできました。

子狸は、その汁を手につけると「百地藏様」にやって来ました。

「ひふみよいつむななやここのつとお。よしよしこれでよし」

お地藏様の頭には、赤い印がちゃんとついていきます。

子狸は、うれしくなっていてどんどん数えていきましたが、赤い実をすりつぶすのに時間がかかって、十を八回まで数えたときに夜が明けてきました。

「大変、大変。早く帰らなきゃ」

子狸は山の穴に走って帰りました。

「ひええ、これは何としたことか」

いつものように野良仕事に出る前に、「百地蔵様」にやって来た八兵衛は、びっくり仰天大声を上げました。

「誰じゃ誰じゃ、こんないたずらをしたのは」

八兵衛は肩に担いでいた鍬を放り投げて、腰の手ぬぐいを引き抜きました。

「お地蔵様、勘弁してください。今きれいに差し上げますから」

八兵衛は、備え付けの手桶に井戸の水を汲んで手ぬぐいをぬらすと、奥の端から順番に赤い頭をきれいにしていきました。

半刻もかかって、お地蔵様の頭が全て元通りになった頃には、すっかりお日様がのぼってしまっておりました。

「やれやれ、もうこんな時間か」

八兵衛は、鍬を担いで手ぬぐいを腰に差し直して野良仕事に出かけていきました。

翌朝、八兵衛が「百地蔵様」にやってくると、なんとなんと同じように頭の赤いお地蔵様が八十体。

子狸は、昨日の夜も、やっぱり赤い汁を作るのに時間がかかって、十を八回までしか数

えられなかったのです。

八兵衛は、腹が立ちましたがかたがありません。今朝もせっせと赤い頭を手ぬぐいでこすって、きれいにしていきました。

翌朝、「まさか今日は無事だろう」とやってくる、なんと頭の赤いお地蔵様が九十体。八兵衛は頭から湯気を出して怒ってしまいました。

「もう三日目だ。許せん。今夜は寝ずに見張って、誰の仕業か突き止めてやる」
でも、そんなことを言っても、お地蔵様の頭はきれいになりません。八兵衛はぶつくとさ言いながらも、ひとつひとつ丁寧にきれいにしていきました。

「母さん。昨日は十を九回まで数えたんだよ。あとひと息だよ」

「そう、坊やはえらいわね。でも、毎晩毎晩出かけているのに、どうして百まで数えられないの。八十まで数えたのなら、あと二十だし、九十まで数えたのなら、あと十じゃない」
「うん。でも、夜行くと、お地蔵様の頭が全部きれいになっていくから、また木の実をすりつぶして数えるでしょう。すると、またとちゅうで夜が明けちゃうんだよ」

「坊や。数えに行くのは、少しの間やめておいた方がいいわ」

母さん狸は、「ははあん、これは『百地蔵様』を守っている八兵衛が、毎朝きれいにしているんだな」と、思いました。このまま続けていたら、夜、見張りに来るに違いない。坊やがやっていることがばれたら、きっとひどい目にあわせるだろう。どうにかして、やめさせなければ。

「坊や。きっと頭をきれいにしているのは、お地蔵様よ。赤い頭が嫌なのよ。だから、もう数えるのはやめておきましょうね」

「やだやだ。絶対やだ。ぼくはやりとげるんだよ。赤いのが嫌なら、いろいろな葉をすりつぶして緑にしたらどう？。お地蔵様は喜ばないかな。黒だったら髪の毛みたいだよ」

「分かった。赤でいいから。今晚だけよ」

母さん狸は、子狸に根負けして許してしまいました。

さてその晩のことです。八兵衛は誰が百地蔵様にいたずらをしているのか確かめてやろうと、真夜中に木の陰で待ち構えておりました。

すると、子狸が手を真っ赤にしてやってくるではありませんか。子狸の仕業だとすぐに知れましたので、とっ捕まえてやろうと思いましたが、子狸が大きな声で「ひいふうみ

「い」と数え出しましたので、しばらく様子を見ることにしました。

子狸は、お地蔵様ひとつひとつの頭に赤い印をつけて数えていきました。

「このつ、とお。これで十が五回、ひいふうみいよ…」

「子狸はかけ算を知らないから、一つずつ数えて百あるか確かめようとしているんだな」

八兵衛は、おかしくなりました。この調子では、また夜が明けてしまいそうです。だって、子狸は本当にゆっくりゆっくり数えていくのですから。

案の定、九十二まで数えたとき、夜が明けてしまいました。子狸は急いで山の奥へと消えていきました。

「さてどうすべえかのう」

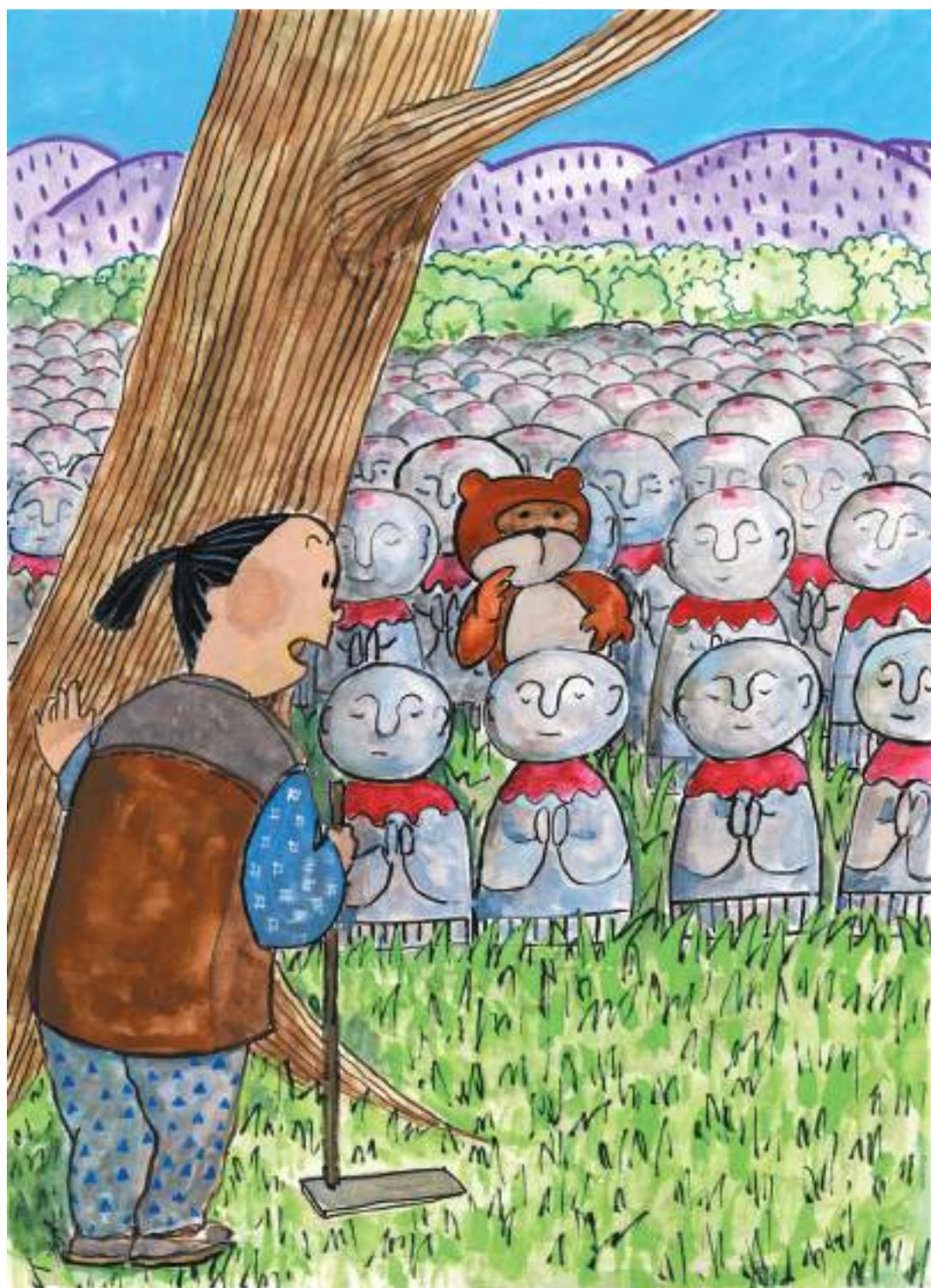
今までと同じように消してしまうのは簡単ですが、子狸が熱心に数えるのを見ってしまうと、それもかわいそうです。

「村の人には、一日辛抱してもらおうべえ」

八兵衛は頭の赤いお地蔵様をそのままにして、野良仕事に出かけました。

さて、黙っていないのは、赤い頭のお地蔵様を見せられた村人達です。

「八兵衛、なまけとらんと、はようお地蔵様の頭をそうじせんか」



何人もが八兵衛の畑にやって来ては、言いつのりします。

「へえ。これが片付いたら帰りますから」

八兵衛は誰がやって来ても、そう言いわけするばかりです。

そして、やっと夜になりました。

昨晚と同じように、木のかげで待っておりますと、子狸がやって来ました。

「やつ、これはどうしたことだろう。赤い印が、まだついたままだ。昨日は確か、十を

九回とふうまで数えたから、今日は十を九回とみいからだ。簡単簡単。十を九回とみい、

十を九回とよう、十を九回といつ」

そして、とうとう「百」と数えきりました。八兵衛は、思わず拍手をしてみました。

「よく頑張ったね」

「今の声はだあれ？」

「わたしは、お地藏様だよ」

八兵衛はとっさにうそをつきました。

「お地藏様。やっと百まで数えました。でも、頭を真っ赤にして、ごめんなさい」

「いいんだよ。ちよっとおしやれをした気分だったよ」

「でも、きれいに洗あらってたじゃないか」

「ああ、あれはね。この上うへだけ雨あめが降ふったからなんだ」

「そうか。ぼくは昼間ひるまは寝ねているから分わからないんだね」

「そうだね」

「よく分わかりました。百地蔵ひやくじぞうさま様は、確たしかに百ひやくありました」

「そう。分わかって良よかったよ」

八兵衛はちべえは、子狸こだぬきが本当ほんとうにうれしそうなので、かけ算ざんなど、教おしえない方ほうがいいと思おもいました。

「では、百地蔵ひやくじぞうさま様、おやすみなさい」

子狸こだぬきは、夜よが明あける前まえに山やまに帰かえっていききました。ちよつとスキップをしながら。

「やれやれ。明日あしたは少すこし早起はやおきして、朝あさから雨あめを降ふらせようかのう」

八兵衛はちべえもニコニコ笑わらいながら、村むらへ帰かえって行いきました。

びっくろせちやっど

向風 歩

こどものオバケは、ひとには、みえません。

みんな、ちいさくてまるい、ふうせんのようなすがたをしているそうです。

こどものオバケは、ひとをいっぱい「びっくり」させて、おおきくなります。

おおきくなると、ちょうどセミがだっぴするように、ふうせんのようなすがたから、おとなのオバケに、へんしんします。

すると、ようやく、にんげんに、すがたがみえるようになるのです。

こどものオバケは、それぞれ、じぶんにぴったりの「びっくり」をみつけて、おとなのオバケになります。

あるところに、うまれてまもない、こどものオバケがいました。

なまえは、「フウ」といいます。

フウのおとうさんは、おおにゆうどうで、おばけやしきではたらいています。

フウのおかあさんは、きゆうけつきで、おとものコウモリをいっぱいしたがえて、こわいえいがの、だいスターです。

「ぼくも、はやくおおきくなりたいなあ」

フウは、おもいました。

「そうだ、これから、にんげんのまちにでかけて、たくさんひとを『びっくり』させよう」
だけど、ちよっぴりしんぱいになりました。

「にんげんって、こわいかなあ」

オバケがひとをこわがっているのは、おおきくなれっこありません。

「ぼくだって、オバケだぞ。こどもだって、やればできるのさ」

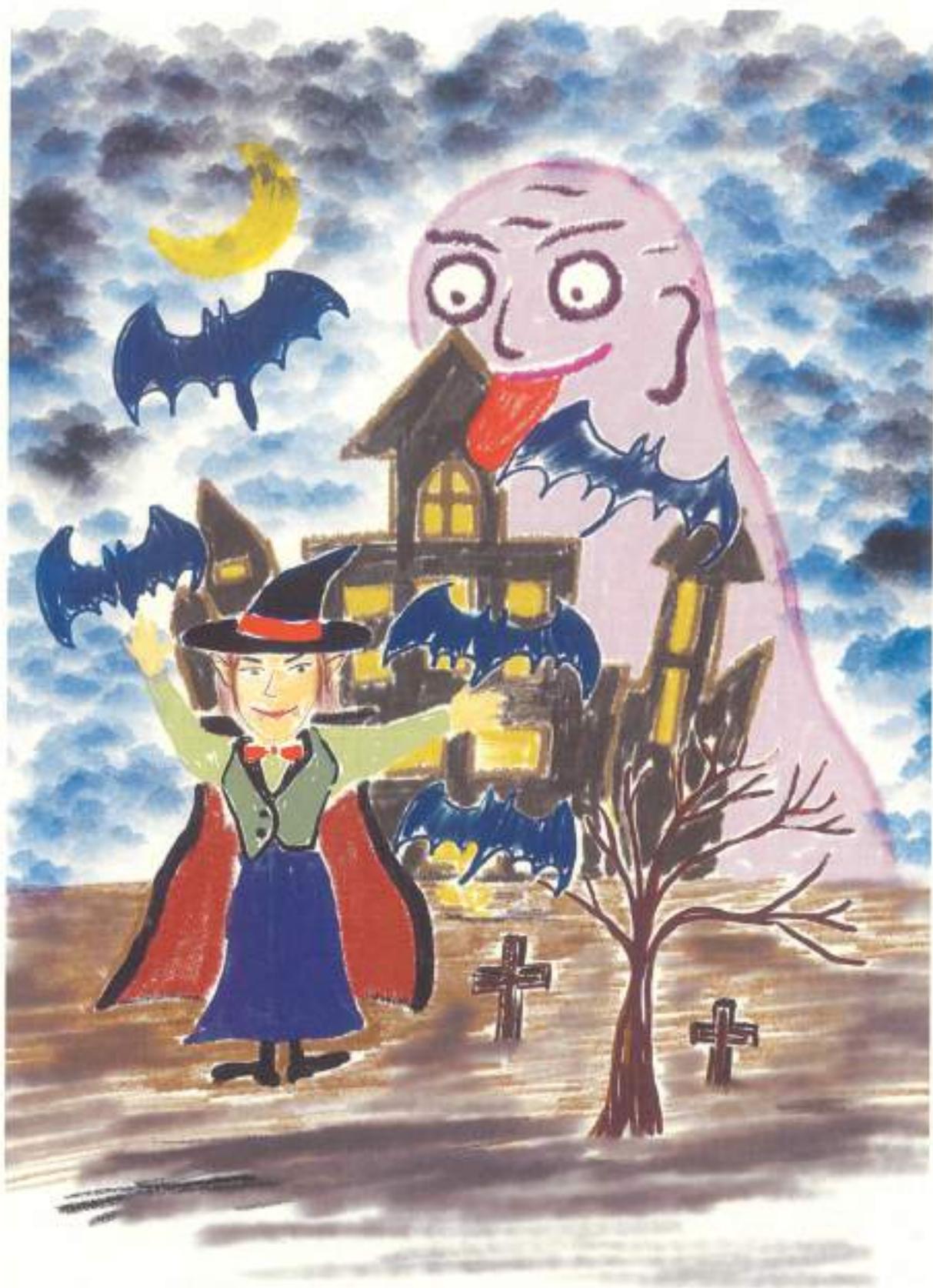
フウは、ゆうきをだして、にんげんのすむまちにでかけました。

おそらを、ふわふわとんでいくのです。

さて、にじかんくらい、たちましたか。

「わあ、おおきなおうちがいっぱいだ」

フウは、にんげんのまちにつきました。



「だれを『びっくり』させちゃおうかな」

フウは、まちのようすをみてまわりました。

もちろん、にんげんたちに、フウのすがたはみえません。

つかまらないので、あんしんです。

「くんくん、いいかおりがするぞ」

あおいやねのおうちから、あまいかおりがします。

フウは、ガラスのまどから、おうちのなかをみました。

「わあ、おいしそうなクッキーだ」

ちようと、キッチンで、おばあさんがクッキーを、やきあげたところでした。

「そうだ、まず、あのおばあさんを『びっくり』させよう」

オバケは、おうちに、かぎがかかっているもへっちらです。

へやのかべを、「スルツ」とぐりぬけると、こっそりキッチンにしのびこみました。

テーブルにおかれた、おおきなしろいおさらには、できたてほかほかのクッキーが、た

くさんありました。

「ゴクリ」

フウは、つばをのみこみました。

そして、おばあさんを「びっくり」させるさくせんを、おもいついたのです。

「えへへ、ぼくが、このクッキーを、ぜんぶたべちゃおう」

「しらないあいだに、おさらのクッキーがなくなったら、きつと、おばあさん『びっくり』するにちがいないぞ」

フウは、おばあさんが、ほかのへやにいつているすきに、クッキーを、ひとつのこらず、たべてしまいました。

「ああ、おいしかった」

フウは、おなかがいっぱいになりました。

すると、そこへ、ようじをすませたおばあさんがもどってきました。

「まあ、どうして！」

おばあさんは、おおきなこえで「びっくり」しました。

「やった、うまくいったぞ」

フウは、ふくれたおなかをさすりながら、おもいました。

だけど、おばあさんは「びっくり」すると、すぐに、とてもこまったような、かなしそ

うなかおになりました。

「ああ、どうでしょう」

「もうすぐ、かわいいまごたちがやってくるわ。きょうは、『てづくりのおいしいクッキーをごちそうする』って、やくそくしていたのに」

「たぶん、できあがったクッキーを、あじみをするつもりで、ぜんぶたべちゃったのね。わたし、くいしんぼうだから」

「もう、あたらしいクッキーをつくるじかんもないわ。ざんねんだけど、ちかくのおみせでおかしをかってきて、あのこたちに、あやまりましょう。ゆるしてくれるといいけれど」

おばあさんは、あわてて、でかけました。

「ぼくは、おばあさんを『びっくり』させたけれど……」

「なんて、わるいことをしてしまったんだ」

フウは、こころが、とてもくるしくなりました。

このままおおきくなったら、ひとをこまらせて、かなしませる、とつてもわるいオバケになってしまいそうです。

「おばあさん、ごめんなさい」

そういいのこして、フウは、おばあさんのおうちから、でていきました。

「きっきのおばあさんみたいに、ひとをこまらせたり、かなしませてしまう『びっくり』は、もう、やめよう……」

フウは、かなしくなって、だれもいない、こうえんのベンチにすわって、なきました。こえがかすれるくらいないで、フウは、ようやくなきやみました。

だけど、ひとを、いっぱい「びっくり」させないと、フウは、おおきくなれません。

「こんどは、きをつけよう」

「さあ、つぎは、だれを『びっくり』させようかな」

フウは、あたらしいきもちで、にんげんのまちを、ふわふわとびました。しばらくとぶと、ひろいどうろにでました。

「きれいなおみせや、おそらにとどきそうな、たかいたてもものがあるぞ」
くるまが、いっぱいはしっていて、ひとが、たくさんはたらいています。

「おやっ、あそこでなにをしているのだろう」

ビルのちゅうしゃじょうにとまったトラックから、おおぜいのひとたちが、にもつをおろしています。

「そうだ、こんどは、あのひとたちを『びっくり』させよう」

こんなこともあるうかと、フウは、びっくりばこをもってきたのです。

こっそり、トラックにしのびこむと、びっくりばこを、おきました。

「あれっ、こんなはこ、あったかな？」

なにも知らないおじさんが、びっくりばこを、もちあげたときです。

「ビロロッン」

びっくりばこから、ピエロのにんぎょうや、おもちゃのカエルがとびだしました。

「ひええっ！」

おじさんは、「びっくり」して、しりもちをつきました。

「ばんざい、やったぞ」

フウは、よろこびました。

ところが、おじさんは「びっくり」すると、かおをまっかにして、おこりました。

「だれだ、こんな、いたずらしたのは」

「いますぐ、でてこい」

まるで、じごくにいるあかおにのように、とてもおそろしいかおでした。



フウは、こわくて、ブルブルふるえました。

「かくれても、むだだぞ」

おじさんにも、フウは、みえないはずです。

だけど、おじさんは、どんどんフウのそばにやってきました。

「しりもちをついて、あやうく、かいしゃのたいせつなにもつをこわすところだったぞ」

「だれもない……、にげちまったのか」

おじさんは、ようやくあきらめて、しごとにもどりました。

「ああ、こわかった」

フウは、まだふるえています。

「ぼくは、おじさんを『びっくり』させたけれど……」

フウは、とてもいやなきもちになりました。

このままおとなになったら、ひとをからかっておこらせるだけの、つまらないオバケになっちゃいます。

「おじさん、ほんとうに、ごめんなさい」

はたらいているおじさんに、ふかぶかとあたまをさげると、フウは、とびさりました。

「おじさんが、あんなにおこったのは、いっしょうけんめい、おしごとをしていたからだ。だれでも、がんばっているときにじやまをされたら、はらをたてるのは、あたりまえだ。ああ、あんなこと、しなければよかった」

フウは、じぶんがくやしくなりました。

そして、だんだん、げんきをなくしていきました。

「きょうは、もう、かえろうかな」

ふらふらと、かわべりをとびながら、フウは、おうちがこいしくなりました。

そのときです。

「うえーん」

ちかくのおおきなはしのまんなかから、にんげんのこどものなきごえがしました。

「どうしたのだろう？」

フウは、きになって、ちかづいてみました。

「えーん、おさいふ、おとしちゃったよう」

おんなのこが、ないています。

「おこづかいをためて、やっと、おかあさんのおたんじょうびのプレゼントを、かいいい

く、とちゅうだったのにい」

かわのそこには、あかいおさいふがしずんでいました。

「ああ、あのおさいふか」

フウは、おんなのこが、かわいいそうになりました。

「そうだ、ぼくなら、たすけてあげられるぞ」

フウは、「ザブン」と、かわにとびこむと、おさいふをひろって、おんなのこのあしもとに、そっとおきました。

「ええっ！」

おんなのこは「びっくり」しました。

だって、こどものオバケは、にんげんにはみえません。

おんなのこには、おとしたおさいふが、いきなりかわのそこからとびだして、ひとりだけに、じぶんのところに、もどってきたようにみえたのですから。

「うれしい」

「きっと、てんしさんがたすけてくれたのに、ちがないわ」

「やさしいてんしさん、ありがとう」

おんなのこは、おれいをいうと、すぐにえがおになって、げんきよくかけだしました。きつと、おかあさんのプレゼントを、はやくかいいにきたかったのでしょうか。

「ぼくは、てんしじゃないよ。オバケだよ」

フウは、くちをとがらせました。

だけど、フウも、にっこりえがおになりました。

「みんなが、えがおになる『びっくり』って、すごく、いいな」

なんだか、こころがあったかくなって、げんきがわいてきます。

「おたんじょうびに、とっぜんプレゼントをわたされて、あのこのおかあさんも、『びっくり』するのかな」

フウは、きめました。

「ぼくは、みんなが、えがおで、しあわせになる『びっくり』を、いっぱいみつけるぞ！」
フウは、すっかりげんきになって、おうちにかえていききました。

フウが、おとなのオバケになって、みなさんにもみえるようになったら、いったいどんなすがたになって、あらわれるのでしょうかね。

ちよっぴり、たのしみです。

ニッツとヤールのはたけじゅうと

鵠沼 更紗

むかしむかし、あるむらにニッツとヤールというふたごのきょうだいがありました。

あるひ、ふたりのおとうさんとおかあさんがいいました。

「わたしたちは、もうこのさきながくはいきられないだろう。これからは、ふたりでなかよくはたけをたがやして、やさいをそだてなさい。そして、そのやさいをうってくらしていくのです。」

それからしばらくして、おとうさんとおかあさんはこのよをさりました。

ニッツとヤールはしばらくおりました。このままではじぶんたちもおなかがすいてしまうとおもいました。

ふたりはおとうさんとおかあさんにいわれたとおりにはたけをたがやすことにしました。

ニッツはいいました。

「ぼくは、どうぶつたちがはたけをあらさないようにここでみはっているから、ヤールがはたけをたがやしてくれよ。」

ヤールはいいました。

「それはよいかんがえだね。それでは、ニッツはみはりをたのんだよ。ぼくはくわではたけをたがやして、やさいのたねをうえるとしよう。」

ヤールはいっしょうけんめいあせをながしてはたけをたがやしました。たねをひとつぶひとつぶていねいにうえては、うえからつちをかぶせてみずをやりました。

いっぽうニッツは、はたけのすみにあるこかげですやすやねむっていました。

しばらくして、はたけはみどりのはっぱでいっぱいになりました。

おいしいはっぱをねらって、むしたちがたくさんとんできます。

ニッツはいいました。

「ぼくはこれいじょうむしがやってこないように、ここでみはっているから、ヤールははたけのむしをおいはらってくれよ。」

ヤールはいいました。

「それはよいかんがえだね。ニッツはむしがやってこないようにみはっていてくれよ。ぼ

くははたけのなかにいるむしをおいはらうから。」

ヤールはあせだくでむしをおいはらいました。

いっぽうニッツは、はたけのすみにあるこかげですやすやねむっていました。

しばらくして、はたけのなかにはやさいがたくさんみられました。にんじん、じゃがいも、たまねぎ、それからこむぎもなりました。

ニッツはいいました。

「ぼくはここでやさいどろぼうがこないようにみはっているから、ヤールはやさいをしゅうかくしてくれよ。」

ヤールはいいました。

「それはよいかんがえだね。ぼくはやさいをしゅうかくするから、ニッツはやさいがどろぼうにぬすまれないようにみはっていてくれよ。」

ヤールはふうふうといきをはいて、かおをまっかにしてやさいをリヤカーにのせました。

いっぽうニッツは、はたけのすみにあるこかげですやすやねむっていました。

リヤカーはやさいでいっばいになりました。ふたりは、おとうさんとおかあさんにいわれたとおり、やさいをうるためにいちばへいくことにしました。



ニッツはいいました。

「ぼくはうしろでやさいがおちないようにみはっているからヤールはリヤカーをひいてくれよ。」

ヤールはいいました。

「それはよいかんがえだね。ぼくがリヤカーをひくから、ニッツはやさいがおちないようにうしろからみはっていてくれよ。」

ヤールはずっしりとおもいリヤカーをちからいっぱいひきました。

ニッツはくちぶえをふきながらリヤカーのうしろをついてあるいていきました。

いちばでは、ふたりのやさいはとぶようにうれしました。そうして、たくさんのおかねをもうけたので、ミルクとたまごをかってかえりました。

うちにかえると、ふたりはとてもまんぞくしたきもちでした。

つぎのひ、ヤールははたけでとれたこむぎをひいてこなにしました。そのこなとミルクとたまごでパンをつくりました。

「これはおいしいね」

ニッツとヤールはかおをみあわせました。

ニッツはいいました。

「このパンをいちばでうったらどうだろう」ヤールはいいました。

「それはよいかんがえだね。」

つぎのひふたりは、パンとやさいをつんでいちばへいきました。

そこへ、となりむらのおうさまのつかいのものがかいにきました。

「おうさまがめしあがるので、いちばでいちばんおいしいやさいとパンをもらおう。」

ヤールは、まるくっておおきなパンと、ピカピカにみがいたやさいをさしました。

つかいのものはたくさんのかんかをおいていきました。

ふたりはうちにかえって、もらったきんかをながめておおよろこびをしました。

ニッツはいいました。

「これからもやさいとパンをうれば、ぼくたちはおおがねもちになれるだろうね。」

ヤールはいいました。

「そうだね。これからはたけしごととパンづくりをがんばろう。」



コンコンコン。

あくるひのあさはやく、ふたりはドアをたたくおとでめがさめました。

ヤールが、めをこすりながらドアをあけると、となりむらのおうさまと、つかいのものがたっていました。ニッツもおどろいてベッドからおきあがりました。

おうさまはいいました。

「おまえたちのつくったやさいとパンをたべて、あまりのうまさにわたしのからだはたいそうよろこんでいる。そこで、おまえたちのどちらかにわたしのしろにきてもらいたい。そして、しろのとなりにはたけをつくり、やさいとパンをつくってほしいのだ。ほうびはもちろんやろう。」

そうきくやいなや、ニッツはベッドからいそいでヤールのとなりへやってきていいました。

「おうさま、わたくしニッツがしろへおともします。」

それをきいたヤールがいました。

「ニッツがいなければだれがはたけのみはりをするというのだ。やさいをどうぶつやむしにくわれそうになったらどうする？ やさいどろぼうがきたらどうしたらよい？ リヤカーからやさいがおちたらきづくひとがないじゃないか。」

するとニッツはいいました。

「そんなことはしんぱいごむよう。ヤールならひとりでだいじょうぶさ。はなれていてもぼくたちはふたごのきょうだいだ。ぼくはおうさまとしろへいくから、ヤールはここにのこっていままでどおりやさいをそだててパンをつくっていればよいのさ。」

ヤールはいいました。

「わかったよ。さみしいけれど、ぼくはひとりでやってみせるよ。ニッツ、かならずかえってきておくれ。それまでぼくはひとりでがんばるよ。」

ふたりはだきあってわかれをおしました。

ニッツがしろへいってしまっただけから、ヤールはひとりではたけしごとをしました。

やさいをうったおかねでミルクとたまごをかい、こむぎをひいたこなとまぜてやいてパンをつくりました。

そうしているうちにおかねがたくさんたまりました。

ヤールはいつかニッツがかえってきたときのために、たまったおかねはつかわずにとっておくことにしました。

いっぽう、おうさまとしろへいったニッツはたいへんなおもいをしていました。

はたけをたがやそうにも、たがやかたがわかりません。ヤールがやっていたように、くわでつちをたがやそうとしましたが、くわがおもくてうまくいきません。

それでも、なんとかたねをまいてみずをやりました。すると、どこからともなくりすがやってきて、うえたばかりのたねをほじってたべているではありませんか。

「あっちへいけ。しっしっ。」

ニッツがそういっておいはらってもりすはうごきません。

それからなにちかしてめがでてきました。

「ぼくだってやればできるのさ。」

とニッツはほこらしいきもちになりました。

めがのびて、はたけはみどりのはっぱでおおわれました。

すると、どこからともなくむしたちがやってきて、ニッツのそだてたやさいのはをおいしそうにたべているではありませんか。それからヤギもやってきました。ニッツはほうきをふりまわしておいはらおうとしましたがうまくいきません。やさいのはっぱはたべられませんでした。まだはんぶんぐらいのこっています。

「はんぶんのこっていれればいいでしょうぶだろう。ぼくだってやればできるのさ。」

そういつてニッツはわらいました。

ときがたち、いよいよしゅうかくのときです。

ニッツは、つちのなかのやさいをほりおこしました。にんじん、じゃがいも、たまねぎは、ヤールがそだてたものとはくらべものにならないほどちいさく、たくさんのあながあいていました。

それでもニッツはいいました。

「みためはわるいけれど、きつとおいしいはずだ。きつてりょうりにいれてしまえば、おきさなんてかんけいないさ。」

そうして、しゅうかくしたやさいをおうさまのつかいのものにわたしました。

そのひのよる、おうさまがかんかんにおこってはたけのよこにあるニッツがねとまりをしているこやへやってきました。

「わたしがもとめていたやさいとぜんぜんちがうではないか。こんなにまずいものではなかったはずだ。」

ニッツはないてあやまりました。

「おうさまもうしわけありません。どうかゆるしてください。」

おうさまはいいました。

「しかたがない。ゆるしてやろう。あすは、パンをやくのだ。ミルクとたまごはつかいのものにもたせるから、こむぎをひいたこなをつかってパンをやくのだ。」

ニッツはいいました。

「はい、わかりました。パンはきつとうまくやきます。」

つぎのひ、ニッツははたけのこむぎをひいてこなにしました。そうして、つかいのものがもってきたミルクとたまごを混ぜてパンをつくりました。けれども、ヤールがつくって来たようにふっくらとやけません。

ニッツがやいたパンをたべたおうさまは、さらにおこってニッツをおいだしてしまいました。

ニッツはなきながらうちにかえりました。

するとヤールはたいそうよろこんでニッツをむかえました。

「ニッツ、おうさまはやさいとパンをよろこんでたべてくれたかい？」

ニッツはなきながらいいました。

「いままで、はたけしごとをてつだわなくてごめんよ。ぼくはみはりをするといっておき

ながら、ほんとうはなにもしていなかったのだ。だから、しろでもやさいもパンもおいしくつくることができずにおいだされたのだよ。これからはまじめにはたらくからどうかゆるしておくれ。」

ヤールはいいました。

「なにをいうのだ。ぼくとニッツはふたりではたけしごとをがんばってきたじゃないか。またいっしょにはたけしごとをがんばろう。」

つぎのひから、ニッツはヤールのまねをしながらあせをかいていっしょうけんめいはたけしごとをしました。そして、パンをつくるときもヤールにおそわりながら、パンをこねました。

ふたりはいちばへ行ってやさいとパンをうり、いつまでもなかよくくらしきましたとさ。

やまどくんのたからもの

弓場 貴子

はがぬけた！

やまどくんはうれしくって、わあい、わあい、とスキップをしました。

ぐらぐらして、ずっと気きになっていたんです。じゆぎちゅうよう中も、ごはんをたべるときも、ねるときも。一年生いちねんせいになってやっと、はじめてぬけたはです。

「やまと、やっとぬけたのか」

いっしょに下校げこうしていたようちゃんが、のぞきこんできました。

「うん、ほら見て」

「じゃあ、こんやはまくらもとにおいてねるの、わすれるなよ」

「なんのこと？」

「知らないのか。ぬけたはをはこに入れて、まくらもとにおいてねると、ねずみがたから

ものところかんしてくれるんだぞ」

ようちゃんは、とくいそうにいいました。

「ただいま。おかあさん、はがぬけたよ！」

おうちにかえると、やまどくんはぬけたはをおかあさんに見せました。

「まあ、よかったわね。おめでどう」

手にのせた小さなはを見て、おかあさんはニコニコしながらいいました。

「そうだわ、あしたはおかあさんのたんじょう日だから、そのはをきねんにほしいなあ」

「だ、だめだよ。ねずみさんが、たからものところかんしてくれるんだって、ようちゃんが
がおしえてくれたんだ」

「まあ、そうなの？」

やまどくんは、ようちゃんからきいたはなしをおかあさんにおしえました。

「それで、ようちゃんはなにのところかんしてもらったの？」

「えっとね、百円玉ひゃくえんだまだって」

やまどくんがそういうと、おかあさんはわらっていいました。

「それはすごいわね。じゃあ、やまとも百円玉ひやくえんだまにこうかんしてもらうのかな」

「ううん、ぼくは……」

やまどくんは、ちらりとおもちやばこのほうを見ました。じつは、ようちゃんのはなしをきいたときから、やまどくんにはかんがえていることがあるのです。

「あつ、いけない。おなべ、おなべ」

おかあさんが、あわててだいでころのほうへ行きました。

やまどくんはおもちやばこからかみねん土どのケースをとり出すと、その中なかに入はいっているかたまりを見ながら、よし、ときめました。やっぱり、この中なかに入れるしかありません。

かみねん土どをわきによせて、ティッシュをひいて、だいじにはをのせます。だいでころから、おかあさんがききました。

「やまとはなににどうかんしてもらおうの？」

「ないしょ！」

やまどくんはおかあさんに見みられないように、白しろいかみになにかをかきました。そしてそれをはこに入れいれ、ふたをしめました。

これで、じゅんびばんたん。

はたして、ねずみさんはやってくるのでしょうか。

そのよること。

やまどくんは、ふと、目がさめました。どこかで小さなはなしごえがします。

「あったあった、このはこじやな」

「ようやくわしのばんがきたぞ。しっかりあうといいがのう」

そうっと目をあけると、まくらもとに、なにやら小さなかげがふたつ。ちようどやまどくんのはこをあけて、中^{なか}みをかくにんしているようです。

「なんじゃ、このかみは」

「それより、はをさがせ。ああ、あった」

「なにかかいてあるようだが、よめんのう」

それをきいて、おもわずやまどくんはこえを上げました。

「ええっ、よめないなんてこまるよ！」

すると、

「うひゃあー！」

二つ^{ふた}のかけは、びっくりしてとび^あ上がりました。そしておどろいたひょうしに、もっていたはを^おぼーんとほうりなげてしまいました。

「ああっ」

たかくとんだやまどくんのはは、きれいなカーブをえがくと、そのままなりにねていたおとうさんの^お大きくあいた^{くち}口めがけて、おちていきました。あわててとろうとしましたが、まにあいません。

すぽっ。

「ふがふが、むう、ううむ、ごっくん」

なんとおとうさんは、いびきといっしょにやまどくんのはをのみこんでしまったのです。

「ええ、そんなあ」

やまどくんは、がっかりしました。ぼくのだいじなは、たからものところかんしてもらはずだったのに。やまどくんの^め目に、みるみるなみだがうかびました。

ところが、やまどくんがな^だき出すそのまえに、すぐとなりでこえがきこえてきました。

「ああ、こんなひどいことってあるもんか」

ちやいろとはいいろの二^にひきは、な^なきながいいました。ふさふさした^け毛、ながくのび

たほそいしっぽ。ニひきは、やまとくんがおもっていたよりもふたまわりくらい大きく、二本足で立っていました。ですが、どこからどう見てもねずみのすがたをしています。

「チュウ先生におこられるなあ」

「わしのは、わしのはが……」

ニひきがあんまりがっかりしているので、やまとくんはかわいそうになってきました。

「あの、ごめんね」

すると、本だなのかげから、べつのがこえがしました。

「気にすることはありませんよ。やまとくんをおこしてしまったかれらがわるいのです」

「チュウ先生！」

あらわれたのは、まっくろのねずみでした。ニひきとちがうのは、ガラス玉のような目に、きらりとひかるメガネをかけているところですよ。

「こんばんは、やまとくん。わしはチュウ。ねずみのはいしやです」

「はいしやさん？」

「そうです。なにしろねずみは、はがいのちなのでねえ」

チュウ先生はそういうと、ニひきのねずみにちかづきました。

「さあ、過ぎてしまったことはしかたありません。つぎのきかいをまちましょう」
ちやいろのねずみは、のろのろと立ち上がりました。がっくりとかたをおとしたはいいろのねずみは、まだうつむいたままです。

やまとくんは、チュウ先生のほうをむいてたずねました。

「ねずみさん、いったいどうしたの？」

「かれはひと月まえ、はがかけてしまったんです。わたたちは、はがおれたり、かけたりにしてしまうと、なにもたべることができません。だからにんげんのぬけたはをちようだいして、あたらしいはをつくるんですよ。そのはをつくるのが、わしのしごとです」

チュウ先生はニツ、と口をひらいて、するどいはを見せてくれました。

「ただし、どんなはでもいい、というわけではなくてね。けんこうでじょうぶで、そしてぴったりあう大きさのはをさがすのに、みんなじゅんばんまちをしているんです」

ぽんぽん、とチュウ先生がかたをたたくと、はいいろのねずみはようやく、ゆっくりと立ち上がりました。

わしのばんがきたぞ、といっていたのは、そういうわけだったんだ。やまとくんは、おちこんでいるねずみがとってもかわいそうになりました。

「あ、そうだ！」

やまとくんは、いいことをおもいつきました。がさごそ、とまくらもどのはこをとり出すと、ゆびのさきでほんのひとつまみ、白いかみねん土しろ かみねん 土を小さくまるめていきます。

「ちよっと、まってね」

「いったいどうしたんです？」

ねずみたちが、やまとくんのまわりにあつまりました。やまとくんはこねたかみねん土かみねん 土を、こんどはぎゅっぎゅっとかためました。小さく、かたく、じょうぶに。

「ほら、見て！」

やまとくんが手のひらにのせて見せたのは、白いかみねん土しろ かみねん 土のかたまり。でも、ぬけたやまとくんのはにそっくりです。

「これはすごい。りっぱなはだ！」

ねずみたちは、そろってやまとくんのおを見上げました。まっくろでキラキラひかる目に見つめられて、やまとくんはへっとわらいました。

「いまはまだやわらかいけど、かわいたらカチカチになるんだよ。これなら、はのかわりになるんじゃない？」

「それでは、ちょっとしつれいして」

チュウ先生はかみねん土のはをとると、はいいろのねずみの口へもっていきました。あーん、とあけた口と、なんども見くらべています。そしていいました。

「うん、まだやわらかいうちにかたちをととのえて、やってみるかちはありそうですね。りっぱなはができるかもしれません」

「やったあー！」

はいいろのねずみは、とび上がってよろこびました。おなじくらいよろこんでいるちやいろのねずみと、手をとりあって、二ひきはダンスをおどりはじめました。やまどくんもうれしくなって、いっしょにおどりました。チュウ先生も、かみねん土のはをだいじそうにかかえて、にこにこわらっています。

「ありがとう、ほんとうにありがとう。こころからおれいというよ。さあ、だからものところかんじゃ。なにがよいかね？」

はいいろのねずみがいいました。

たからもの。やまどくんは、ごくりとつばをのみました。そして、かみねん土のはこちら、一まいのかみをとり出しました。



「あ、しゃっきの」

ちやいろのねずみがいいました。

「それと、これ……」

やまとくんは、はこからもう一つ、手のひらほどのかたまりをつまみ上げると、ねずみたちのまえにおきました。くしゃりとにぎりつぶしたようなかたまりに、ほそいぼうみたいなものがついています。

チユウ先生せんせいが、やまとくんからうけとったかみをよみ上げました。

『お花はなと、こうかんしてください』

ねずみたちは、かみねん土どのかたまりと、やまとくんのかおを、かわるがわる見みつめました。

「これね、ぼくがつくったかみねん土どのお花はな、なんだ。あしたはおかあさんのたんじょう日びだから、がんばってつくったんだけど」

やまとくんのこえは、だんだん小さくほそくなっていきます。

「でも、うまくいなくて……だから……」

「よし、わかった！」

はいいろのねずみはひぎをポンとたたくと、大きなこえでいいました。さっきまでのおちこんでいたすがたが、うそみたいです。やまどくんは、ぽかんと目をまるくしました。「花^{はな}じゃな、花^{はな}。よし、こうかんせいりつ！、あしたのあさをたのしみにしておれ！」

「うが早い^{はや}か、ものすごいスピードでそとへかけ出していってしまいました。」

「おおお、わしもこうしちゃおれん」

ちやいろのねずみも、あわててあとをおいます。ねずみは本^{ほん}だなの手^てまえでくるつとふりかえると、やまどくんのほうへぺこっとあたまを下げ、いそいでへやを出^でていきました。

「おさわがせしましたね」

ぽかんとしたまま見^みおくれたやまどくんに、チュウ先生^{せんせい}はこえをかけました。

「ううん、ぼくだって」

「りっぱなはを、ありがとう」

チュウ先生^{せんせい}はれいぎただしく、ぴしりとおじぎをしました。つられるように、やまどくんもあたまを下^さげました。

「それでは、しつれい。あすのあさを、どうぞおたのしみに」

やまどくんがかおを上げ^あげたときには、チュウ先生^{せんせい}のすがたはありませんでした。

あたりはしずかなくらやみにつつまれています。もしかして、ゆめだったのかな。やまどくんは目をこらしてはこの中をのぞいてみましたが、ぬけたはは、どこにも見あたりませんでした。

あさになりました。

「おかあさん、おかあさん！」

バタバタとかいだんをかけおり、やまどくんはだいどころのおかあさんのところへ走りましました。

「やまと、おはよう」

「おはよう、おかあさん！ ねえ見て！」

やまどくんは、かみねん土のはこをさし出しました。白、きいろ、ピンク、赤。なんとそこには、いろとりどりのお花がいっぱいあって、いいかおりがしています。

「まあ、きれい。どうしたの」

「あのね、ねずみさんにたからものでおねがいたんだ。ぼくのはのかわりをかみねん土でつくってね、これならちゃんとはになるからってチュウ先生がほめてくれて、それで」

やまとくんはこうふんしながら、いっしょうけんめいおかあさんにはなしました。ねずみたちのこと、おとうさんがはをのみこんでしまったこと、チュウ先生の^{せんせい}こと。じつときいていたおかあさんは、やまとくんのあたまを、ぽんぽん、となでてくれました。

「もしかして、おかあさんのために、ぬけたはをお花^{はな}とこうかんしてくれただけなの？」

「うん。おかあさんにどうしてもプレゼントしたかったから！　おかあさん、たんじょう日^びおめでどう！」

はこの中^{なか}のたくさんのお花^{はな}を、おかあさんはうれしそうに一つずつ手^てにとってみました。するとさいごに、白^{しろ}いかみねん土^どがのこりました。くしゃりとつぶしたようなかたまりと、ほそいぼう。あのかみねん土^どのお花^{はな}です。

「これは、やまとが作^{つく}ってくれたお花^{はな}？」

「う、うん……」

おかあさんはねん土^どのお花^{はな}と、やまとくんのかおを見^みつめると、にっこりとわらいました。

「きれいなお花^{はな}、とってもうれしい。中^{なか}でもおかあさん、このやまとのお花^{はな}がいちばんすきだな。ありがとう、やまと」

そしてぎゅうっと、やまとくんのことをだきしめてくれました。やまとくんも、おかあ



さんのことをぎゅうっとだきしめました。

「たからものを、ありがとう」

ふわりとやわらかい花はなのかおりが、ふたりをやさしくつつみました。